

暴走族集団への関与

—関与を促進する要因と非行経験との関連—¹⁾

小 菅 律*・岡村和子*・藤田悟郎*

Involvement in *Bosozoku* Group (motorcycle gang)
—Factors Facilitating the Involvement in *Bosozoku* Group and its
Association with Juvenile Delinquency—

Ritsu KOSUGE,* Kazuko OKAMURA,* and Goro FUJITA*

This study investigated factors facilitating involvement in *Bosozoku* group (motorcycle gang) and how the involvement in the *Bosozoku* is related to juvenile delinquency. *Bosozoku* membership as well as participation in *Bosozoku* group activities on the road was defined as the involvement in *Bosozoku* group. Six hundred and fifty-two *Bosozoku* males aged between 16 and 18 of reckless group drivers were asked to complete the questionnaires given by the police. The results showed that the more they were interested in *Bosozoku* in the third year of lower secondary school, the more deep was their involvement. However, there was no relationship between the tendency to disobey in the third year of lower secondary school and their involvement in *Bosozoku* group. Further, the more frequent participation in *Bosozoku* activities on the road suggested more frequent delinquency. However, *Bosozoku* membership itself had no significant association with frequency of delinquency. These findings suggest the importance of motivational factor in facilitating the youngsters to involve themselves in *Bosozoku* group. Our study also indicates that more attention should be paid to preventing youngsters from participating in *Bosozoku* activities on the road, including peripheral members (occasional participants).

key words: gang, *Bosozoku*, juvenile delinquent, involvement in *Bosozoku* group

問 題

現在、暴走族は減少傾向にあるが、それでも未だ看過できない問題であることに変わりはない。本研究では、少年が暴走族集団に関与することを阻止するための対策に資することを目指し、暴走族集団への関与と非行経験に関する検討を行う。

暴走族構成員数が最多の42,510人であった1982年当時は暴走族が社会現象となっていた（佐藤、1984など）が、それ以降は減少を続け、現在（2008年）では11,516人とピーク時の約4分の1となっている（伊藤、2009）。しかしながら、以下のような点で暴走族は引き続き対策を講じていくべき重要な問題である。まず、悪質性・凶悪性は堅持さ

* 科学警察研究所交通科学部

Second Traffic Science Section, National Research Institute of Police Science
6-3-1 Kashiwanoha, Kashiwa, Chiba 277-0882, Japan
kosuge@nrips.go.jp, okamura@nrips.go.jp, fujita@nrips.go.jp

¹⁾ 本稿中では、「暴走族」は暴走を行う者や暴走行為に伴う現象を、「暴走族集団」は暴走を行う集団、「暴走族構成員」は暴走族とみなせる者、を示す語とする。但し、引用文献において用いられている場合、固有名詞についてはこの限りではない。

れている(伊藤, 2009)。事実, 現在(2008年)でも, 人口あたりの検挙・補導件数について, 暴走族少年は一般少年より, 刑法犯全体で約12倍, 粗暴犯で約50倍高い(警察庁, 2009)。そして, 我が国の非行集団の中では, 暴走族集団は依然として主要なものである。2008年の刑法犯少年における非行集団加入者のうち, 暴走族集団への加入者は31%となっている(警察庁生活安全局少年課, 2009)。

こうした暴走族問題に対して, 重要な対策の1つが加入阻止である。2001年には「暴走族への加入防止等施策検討懇談会」が開催され, 暴走族集団への加入防止, 離脱促進対策の強化に向けた提言が出され(警察庁, 2002), 各地域の中学校・高等学校では, 現在でも暴走族加入阻止教室を開く取り組みを行っている(警察庁, 2008)。しかし, 近年では暴走族集団に加入しないで活動する暴走族というものも存在し, 2008年度には共同危険型暴走族²⁾の51%は暴走族集団に加入していない(伊藤, 2009)。これは例えば, 暴走族OBが暴走族引退後も集団暴走に参加する場合や, 暴走族集団には加入せずに集団暴走にのみ参加する周辺のメンバーのような者である。彼らは, 暴走族集団には未加入でありながらも集団暴走行為には参加し, 暴走族としての活動を行い, 暴走族集団に関与しているのである。このことから, 暴走族少年において暴走族集団との関わりを考える際, 加入・未加入に注目するだけでは不十分であり, 実際の集団暴走行為にどの程度参加しているかも考慮しなければならない。対策としても, 「加入阻止」のみならず「関与阻止」を目指していく必要があるだろう。

では, 実際にどのような少年が暴走族集団への関与を深めていくのだろうか。そして, そもそも暴走族集団に関与することがどのような結果をもたらすのだろうか。以降では, これに関する先行研究について見ていきたい。

²⁾ 暴走族のタイプの主なものとして3つが挙げられる。共同危険型とは, 爆音暴走を集団で行うタイプで, 二輪車に乗って無免許運転・信号無視など違反行為を行い, 夜間に走行する傾向がある。違法競走型とは, 主に運転技術や走行速度等を競うタイプで, ドリフト族・ルーレット族・ゼロヨン族などと呼ばれ, 四輪車が多い。旧車會とは, 近年見られるようになってきた, 元暴走族によって構成された比較的高年齢の暴走族集団であり, 年式の古い二輪車に乗る。

暴走族研究

暴走族に関する先行研究は約30年前に数多く行われている。その中で, まず, 加入阻止のために注目すべき少年の特徴について示唆が得られる研究としては, 以下のようなものがある。田村・麦島(1975)では, グループに加入するきっかけは友人関係が主で, 加入動機としては, 車に乗って走ることの楽しさより仲間を得ることを求めていると指摘されている。しかし, その5年後に行われた調査を分析した田村(1981a)では, 加入動機は「車の運転の快感とそれに伴う優越感, 派手さと, 仲間を求める欲求の両者」とされ, 前回調査で表面的動機(車志向)の項目を入れなかったことがこの差異の理由であると述べられている。但し, この田村・麦島(1975), 田村(1981a)は, 暴走族集団加入者についてのみ検討されたもので, 未加入であるが活動している暴走族については対象から除外されている。

こうした暴走族集団加入者における友人志向・車志向の高さは, 国際交通安全学会004プロジェクトチーム(1977), 長山(1989)でも指摘されている。一般高校生を車接近・車志向性の高低に従って3群に分類し, 暴走族少年を車志向性が最も高い群として, 4群の特性について比較したところ, 車志向性と友人関係志向性には強い関連があることが明らかとなった。この4群のいずれに分類されるかに対する予測力が非常に高い車志向性テストを開発したとしている(長山, 1989)。

このように先行研究では, 暴走族集団加入者の特徴として車志向・友人志向など, 本人の内部的な力である動機要因が挙げられてきた。しかし, これらはあくまでも暴走族集団加入者の加入後の特性について考察されたにすぎず, 加入前については調べられていない。さらに, 動機要因より顕在的であるため, 家庭や学校でより発見しやすいと考えられる, 逸脱傾向や家族・教師に対する不服従傾向といった行動要因と比較して, どちらの影響が強いのかも明らかとはなっていない。またいずれの研究も約30年前のものであり, 現在の暴走族にその知見が当てはまるかについては未検証である。

続いて, 暴走族集団への加入が非行を助長するかについて示唆が得られる研究として, 田村(1981b)による暴走族集団加入者対象の調査では, 小グループより大グループで非行化が著しいことが, 原田・

田村(1981)による集団離脱者対象の調査では、離脱後に非行をする者が減少する一方、離脱後も犯罪を行うものは、暴走族時代の非行パターンと類似していることが指摘されている。これらのことから非行行動に対し何らかの暴走族集団加入の影響があることが予測できる。しかし、それぞれ加入時・離脱後の非行行動を扱っているが、集団加入の前後を比較しているわけではない。そして、こうした研究結果も約30年前のものであり、現在の暴走族についても同様であるかはわかっていない。さらに、前述の田村・麦島(1975)、田村(1981a)と同様に、暴走族集団加入者のみを対象としており、集団未加入の暴走族については研究がなされていない。

非行集団研究

非行集団に関する研究ということでは、近年諸外国でも行われている。非行集団に加入する要因に関する研究では、コミュニティ(地域)・家族・学校・ピア(仲間)・個人・先行する問題行動という6つの領域においてさまざまな因子が明らかとなっている。このうち、コミュニティ・家族・学校・ピアは本人外要因、個人・先行する問題行動が本人内要因と考えられる。暴走族研究の項で述べた、動機要因・行動要因はいずれも本人内要因といえるだろう。ここではこの本人内要因に注目する。まず、個人の領域では数多くの因子の中でも、非行の信念・反社会的信念、過活動性の影響を見出した研究が多い(Lacourse, Nagin, Vitaro, Cote, Arseneault, & Tremblay, 2006; Thornberry, Krohn, Lizotte, Smith, & Tobin, 2003 など)。一方、向社会的活動・宗教的活動は関連がないことが複数の研究で示され(Hill, Howell, Hawkins & Battin-Pearson, 1999)、自尊心については、影響の有無に関する知見が一貫していない(Esbensen, Huizinga, & Weiher, 1993b; Wang, 1994 など)。また、先行する問題行動の領域においては、一般的非行(Curry, 2000; Hill, Hawkins, Catalano, Kosterman, Abbott, & Edwards, 1996 など)、暴力・加害(Fagan, 1990; Le Blanc, & Lanctot, 1998 など)、アルコール・薬物使用(Bjerregaard & Smith, 1993; Cohen, Williams, Bekelman, & Crosse, 1994 など)、早熟なデート・性的行動(Le Blanc et al., 1998; Thornberry et al., 2003 など)の影響が多く示され、影響がないとされる因子がほとんどない。このように、

非行集団研究においては、集団加入に影響する要因として、動機要因・行動要因双方が挙げられてきているが、特に行動要因に関してはその影響の大きさが指摘されてきている。

一方、非行集団加入が非行行動に与える影響に関する研究の主なものとしては、選択モデル、社会的促進モデルの検証を行っている研究が挙げられる。非行集団加入後の非行行動の増加に関し、選択モデルとは、元々非行行動が高い傾向にある少年が非行集団加入の傾向も高いという説明をする説、社会的促進モデルとは、非行集団加入によって非行行動の増加が導かれたとする説である。複数の研究の知見から、選択モデルについてはその影響が散見されるものの一貫した結果は得られていない。例えば、Gordon (2004) は支持しているが、Esbensen & Huizinga (1993a) は支持していない。Thornberry, Krohn, Lizotte, & Chard-Wierschem (1993) は暴力的非行で支持しているが、財産的非行で支持していないなど、結果が異なっている。一方、社会的促進モデルについては、Bjerregaard & Lizotte (1995), Esbensen et al. (1993a), Gordon (2004), Hill et al. (1996) など支持する結果が多く、暴力的非行・財産的非行・薬物関連非行のいずれに対しても影響が見られている。非行集団加入の影響を説明するモデルとしては、選択モデルよりも社会的促進モデルを支持する研究が多いといえる。

しかし、非行集団加入の危険因子研究も、集団加入が非行行動に与える影響に関する研究も、対象は非行集団一般である。また、研究が行われたのは主にアメリカ・カナダである。ゆえに、これらの知見が日本の暴走族集団にどの程度適用できるかはまだ検証されていない。

ところで、こうした外国の非行集団研究において、「Gang」であるとみなす指標として、最も一般的なのが非行集団への加入(所属)経験である(Thornberry et al., 1993; Bjerregaard et al., 1995; Thornberry et al., 2003; Gordon, 2004)。これに加え、その非行集団が違法・非行活動を行っているか(Esbensen et al., 1993a; Lacourse et al., 2006)、その非行集団の名前が回答できるか(Hill et al., 1999)を指標とする場合もある。これらは全て、非行集団への加入経験が「Gang」とみなすための必要条件となっており、ここまで挙げてきた非行集団研究の多

くがこの指標を用いている。それに対し、Curry, Decker, & Egley (2002) では、非行集団への非加入者の中にも非行集団に関与している者がおり、全く関与していない非加入者に比べ非行程度が高いことが見出されている。暴走族についても、前述の通り近年の暴走族少年のほぼ半数が集団には未加入でありながらも暴走族集団に関与していることから、Curry et al. (2002) の知見と同様、「暴走族」とみなす指標は加入・未加入だけでは不十分である。暴走族集団に加入している者、暴走族活動に参加している者の双方を合わせて暴走族と考えるのが実態に即しているといえる。

目 的

本研究は、非行集団参加の一例として、暴走族集団への関与を阻止することに資するような知見を得ることを目指すために、暴走族集団への関与を促す要因、暴走族集団への関与が非行行動に与える影響を探ることを目的とする。先行研究をふまえ、Figure 1 のようなモデルを想定した。まず、暴走族集団との関与度には、本人内要因のうち、動機要因・行動要因の双方が影響を及ぼす。これまでの暴走族研究では主に動機要因が挙げられてきたが、非行集団全般の研究では行動要因の影響の大きさが指摘されているため、動機要因・行動要因のいずれもが影響すると仮定する。すなわち、暴走族集団関与前の動機要因・行動要因が高い者ほど、暴走族集団への関与度が高くなると考える。第二に、暴走族集団への関与が非行経験に与える影響としては、選択モデル・社会的促進モデル双方の考え方が適用できると想定する。選択モデルの考え方（以降これを選択説とする）が適用できるならば、暴走族集団関与前の行動要因の高い者が暴走族集団への関与度が高いと想定される。また、社会的促進モデルの考え方（以降、これを社会的促進説とする）が適用できるならば、暴走族集団への関与度が高いほど非行経験は多

いと想定される。

先行研究で挙げられてきたような友人志向・車志向に代表される動機要因は、それ自体が直接非行経験を高めるとは考えにくい。このため仮説では、動機要因と非行経験の関連はないとした。

方 法

手続き

2008 年 6 月～7 月に、全国の都道府県警察において、警察が暴走族構成員として把握している者を対象に質問票による調査を実施した。都道府県ごとの調査票配布数は、2007 年度の都道府県別の暴走族構成員数に対応させて比例配分を行った。調査を依頼する際、警察職員が調査対象者に調査の目的と内容を説明し、同意が得られた対象者にだけ調査を行った。2,300 人を目標として配布し、2,063 票を回収した。目標数に対する回収率は 89.7% であった。

調査票

内容は、生活環境、車やオートバイ、暴走族加入の動機、暴力団との関係、普段の生活、警察の取締り、カー雑誌、旧車會²⁾ などに関するものであった。本研究ではこのうちの一部を用いた。性別・年齢、参加したことのある集団暴走のうち最もあてはまるタイプ、旧車會を知っているか否かと加入の有無、中学 3 年生（以下、中 3）時点での暴走族への加入の有無についての項目に加え、次に述べるような項目を分析に用いた。

まず、2 種類の暴走族集団と関わる以前（中 3 時）に関する変数を使用した。中 3 時の不服従傾向は、①先生の言うことは、ほとんど聞かなかった、②両親など家族の言うことは、ほとんど聞かなかった、という 2 項目に対し、中 3 当時の状態はどうだったか、「はい」・「いいえ」の 2 件法で尋ねた。これを行動要因と考えた。また、中 3 時の暴走族への興味は、①暴走族にあこがれていた、②暴走族に関心があった、の 2 項目に対し、中 3 当時の状態はどうだったか、「はい」・「いいえ」の 2 件法で尋ねた。これを動機要因と考えた。

第二に、2 種類の暴走族集団への関与度に関する変数を使用した。暴走族集団への加入経験は、「現在、入っている」・「以前入っていたことがある」・「入っていないが、つき合いはある」・「入っていない

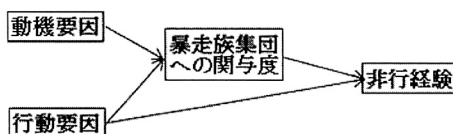


Figure 1 暴走族少年が暴走族集団への関与を経
て非行経験に至る経路の予測モデル

い」のうちから選択させ、このうち、「現在、入っている」か「以前入っていたことがある」を選択した者を「暴走族集団への加入経験あり」とした。集団暴走行為への参加回数（以下、集団暴走参加回数）は、「参加したことはない」・「1～3回」・「4～5回」・「6～9回」・「10回以上」のうちから選択させた。本研究では、暴走族集団への加入経験と、集団暴走参加回数を合わせて暴走族集団への関与の指標とした。これは、前述の通り、暴走族集団への関与度について、加入・未加入に注目するだけでは不十分であり、より広くとらえる視点が必要と考えられるためである。

第三は、非行経験に関する変数であり、項目内容は宮寺・大江・渡邊・藤田・森田・中谷(2007)において非行経験として用いられた以下の12行為であった。これについて経験があるかどうかを2件法で尋ねた。①理由なしに学校をさぼった（以下、怠学）、②親に無断で何度も夜に外出した（以下、夜間の無断外出）、③自分の家の金や物をこっそり持ち出した（以下、金品の持ち出し）、④家出した（以下、家出）、⑤お金を支払わないで商品を店から持ち出した（以下、万引）、⑥他人の自転車やバイク等を無断で乗り回した（以下、占有離脱物横領）、⑦免許がないのに車やバイクを運転した（以下、無免許運転）、⑧人の物を盗んだ（以下、窃盗）、⑨人をおどして金や物をまき上げた（以下、恐喝）、⑩他人の家や建物に勝手に入って何かを盗んだ（以下、侵入盗）、⑪人をなぐったり、けったりしてケガをさせた（以下、傷害）、⑫わざと他人の物をきずつけたり、こわしたりした（以下、器物損壊）。

対象

調査対象者 本研究の対象は以下の条件を満たすものとした。まず、暴走族であるとみなす基準として、集団暴走に参加した経験を持つ者であった。第二に、共同危険型暴走族とみなす基準として、参加する暴走のタイプが共同危険型であること、旧車會を知らないまたは加入していないことであった。ここで共同危険型暴走族を選んだ理由は、2008年時点で86.7%（警察庁，2009）と暴走族の大多数であるためであった。第三に、16～18歳であることであった。高年齢化といわれながらも共同危険型においては未だ少年が優位であり、中でも、16～18歳で約7割（伊藤，2009）を占めているためであ

た。第四に、男性であることで、これは2008年時点で共同危険型暴走族の97%（警察庁，2009）は男性だからであった。第五に、中3時点で暴走族に加入していないことであった。これは、中3時点に関する変数を、暴走族との関与以前とするためであった。このような5つの条件に該当する者は652人となった。

地域差 対象者652人の地域分布を見てみると、北海道6人(0.9%)、東北地方14人(2.1%)、関東地方124人(19.0%)、甲信越・北陸地方38人(5.8%)、東海地方98人(15.0%)、近畿地方163人(25.0%)、中国地方30人(4.6%)、四国地方49人(7.5%)、九州地方111人(17.0%)、沖縄県19人(2.9%)であった。

調査対象者を、本調査の全回答者(2,063人)、警察庁資料の2007年度暴走族構成員それぞれの地域分布と比較した(Figure 2)。本研究の対象者と全回答者では甲信越・北陸地方、四国地方が多く、近畿地方が少ない傾向が見られた。調査対象者の項で述べた条件を満たす母集団の正確な統計が存在しないこと、警察庁統計はあくまで警察が把握している暴走族構成員数であり実際の暴走族構成員数と一致しているとは限らないことから、代表性について厳密な議論はできないが、一部に地域の偏りが見られ、

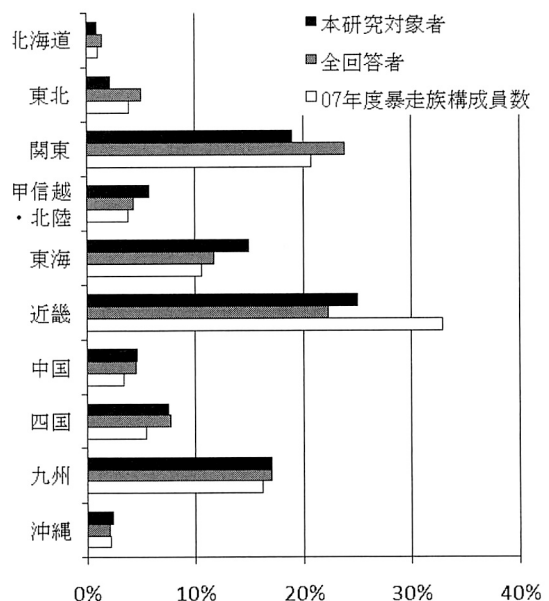


Figure 2 本研究対象者・全回答者・2007年度暴走族構成員の地域別分布

結果を解釈する際には、地域差をふまえる必要がある。しかしながら、全国規模で調査票を配布し、各地方を網羅した幅広いサンプルを対象としている点で、概ね代表性は高いと考えられるだろう。

分析方法

本研究で扱う経験に関する測度（暴走族集団への加入経験、集団暴走参加回数、非行経験）は、傾向を測る変数と異なり、年齢とともに増加することはあっても、減少することはないため、年齢差があることが予測され、経験の均一化を図る必要がある。さらに、暴走族活動とは数カ月から1年、一部の長い者でも2,3年という非常に短期間の活動であり（警察庁, 2001; 田村・麦島, 1975; 田村, 1981a), ある特定の年齢（多くは18歳）になると引退していく者が多い傾向にある（北海道警察, 2007）。したがって、十代の少年である暴走族にとっての1年間は短いものではなく、1年間にさまざまな変化が起こりうることから、分析は各歳で行うこととした。研究デザインは横断的調査であり、分析手法としては、パス解析を用いた。分析ソフトはPASW Statistics 17.0, Amos17.0を利用した。

結 果

暴走族集団への関与度

暴走族集団への加入経験別にみた集団暴走参加回数の内訳をFigure 3に示した。ここに示す通り、暴走族集団への加入経験がなくても10回以上の集団暴走に参加している者がいる一方、加入経験があっても1~3回しか集団暴走に参加したことがない者もいた。このことから、前に述べた通り、暴走族集団への関与度は、暴走族集団への加入経験に注目す

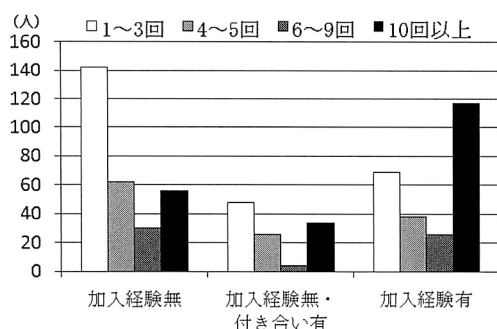


Figure 3 暴走族集団への加入経験と集団暴走参加回数

るだけでなく、集団暴走参加回数も考え合わせなければならないことがわかった。

項目の分析

中3時に関する変数 中3時に関する4項目について、経験ありと答えた割合は49.5~69.8%であった。中3時の不服従傾向2項目について、スピアマンの順位相関係数は0.63, クロンバックの α 係数は0.77と十分な値が得られた。以降では2項目の合計得点を中3時の不服従傾向得点として分析に用いた。また、中3時の暴走族への興味項目2項目について、スピアマンの順位相関係数は0.58, クロンバックの α 係数は0.73と十分な値が得られた。以降では2項目の合計得点を中3時の暴走族への興味得点として分析に用いた。

非行経験 非行経験に関する12項目について、経験ありと答えた割合が20%未満であったのは、⑩侵入盗, 20~40%であったのが④家出, ⑨恐喝, ⑫器物損壊, 40~60%であったのが③金品の持ち出し, ⑤万引, ⑥占有離脱物横領, ⑧窃盗, ⑪傷害, 60~80%であったのが⑦無免許運転, 80%以上であったのが①怠学, ②夜間の無断外出であった。12項目の合計得点を非行経験得点とみなしてよいか、これらの一元性を確認する目的で分析を行った。非行経験項目は二値のカテゴリカルデータであるため、多重対応分析を行った。その結果、カテゴリ数量化の値が第1次元で「経験なし」が-0.81~-0.15, 「経験あり」が0.12~1.11であり、それぞれのカテゴリで等質とみなすことができた。ゆえに、第1次元は非行経験の程度と考えられた。クロンバックの α 係数は0.80と十分な値であった。以降ではこの12項目の合計得点を非行経験得点として分析に用いた。

年齢差の分析

各尺度について、年齢差を調べるために、分析を行った。一元配置分散分析の結果、中3時不服従傾向 ($F(2, 649)=1.32$, $MSe=1.05$, $n.s.$), 中3時暴走族への興味 ($F(2, 649)=1.03$, $MSe=0.75$, $n.s.$), 非行経験 ($F(2, 649)=0.05$, $MSe=0.43$, $n.s.$) について、いずれも年齢による有意な差は見られなかった。集団暴走参加回数について、クラスカル・ウォリス検定を行った結果、群間の有意な差は見られなかった ($H=5.81$, $df=2$, $n.s.$)。暴走族集団への加入経験については、カイ二乗検定を行った結果、有意な関連

が見られた ($\chi^2(4)=17.88, p<0.01$)。残差分析によると、16 歳では加入経験のある者が少なく、加入経験のない者が多かったが、18 歳では、加入経験のある者が多く、加入経験はないが付き合いはあるという者が少なかった。すなわち、16 歳では加入経験が少ない、18 歳では加入経験が多いという傾向が見られた。中 3 時の変数について年齢差が見られなかったことから、中 3 時の状態についての回答が年齢とともに変化してしまうという可能性は否定された。しかし、暴走族集団への加入経験については年齢差が見られたことから、前述の通り、以降では年齢ごとの分析を行った。

非行経験に関するパス解析

16 歳、17 歳、18 歳で別個に、Figure 1 のモデル（これを仮説モデルとする）に基づきパス解析を行った。この際、暴走族集団への関与度に関する 2 つの変数について、加入経験がある者ほど集団暴走参加回数が多いことが考えられるため、加入経験から集団暴走参加回数にパスを引いた。また、中 3 時の暴走族への興味と中 3 時の不服従傾向には相互に関連があることが考えられるため、相関を想定した。この仮説モデルに従ったパス解析の結果、有意とならなかったパスが存在した。そこで、有意とならなかったパスを削除した上で再度パス解析を行った（これを削除後モデルとする）。カイ二乗値、GFI、AGFI、CFI、RMSEA の値について、両モデルとも全年齢において適合度がよいという基準を満たしていた（朝野・鈴木・小島、2005）。ここで、競合するモデルの比較に用いる AIC・CAIC の値を見てみると、16～18 歳のいずれの年齢においても、仮説モデルより削除後モデルの値が小さく、削除後モデルのあてはまりがよかった (Table 1)。ゆえに、全年齢において削除後モデルを採用した。

各歳の削除後モデル図を Figure 4～6 に示した。まず、16 歳では、中 3 時の暴走族への興味が高い者ほど、加入経験があり、集団暴走参加回数も多いと

Table 1 仮説モデルと削除後モデルの AIC・CAIC の値比較 (各歳別)

	16 歳		17 歳		18 歳	
	仮説	削除後	仮説	削除後	仮説	削除後
AIC	28.43	23.48	29.99	26.72	30.43	28.59
CAIC	85.52	62.83	95.60	73.59	91.82	76.82

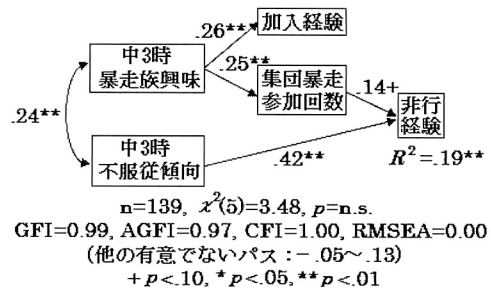


Figure 4 暴走族少年 (16 歳) の非行経験に関するパス図

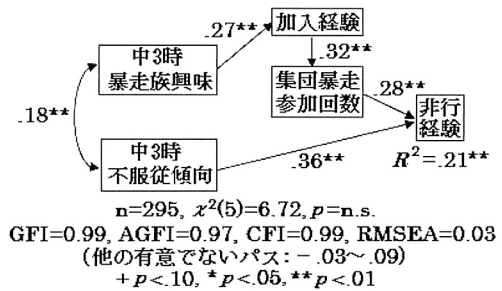


Figure 5 暴走族少年 (17 歳) の非行経験に関するパス図

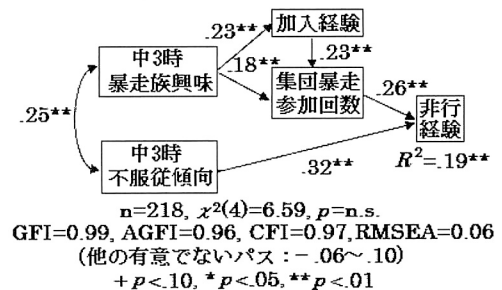


Figure 6 暴走族少年 (18 歳) の非行経験に関するパス図

ということがわかった。一方、中 3 時の不服従傾向と、暴走族集団への関与度（加入経験・集団暴走参加回数）には関連が見られなかった。また、中 3 時の不服従傾向が高い者ほど、非行経験が多いことが示された。さらに、集団暴走参加回数が多い者ほど、非行経験が多いという傾向があった。そして、中 3 時の暴走族への興味と中 3 時の不服従傾向に正の相関が見られた。

次に、17 歳では、中 3 時の暴走族への興味が高い者ほど、加入経験がある者が多いことがわかったが、中 3 時の暴走族への興味と集団暴走参加回数には関連がなかった。一方、中 3 時の不服従傾向と、

暴走族集団への関与度（加入経験・集団暴走参加回数）にも関連が見られなかった。そして、加入経験がある者ほど集団暴走参加回数が多いことが明らかとなった。また、中3時の不服従傾向が高い者ほど、集団暴走参加回数が多い者ほど、非行経験が多いことが示された。さらに、中3時の暴走族への興味と中3時の不服従傾向に正の相関が見られた。

第三に、18歳では、中3時の暴走族への興味が高い者ほど、加入経験がある者が多く、集団暴走参加回数も多いということがわかった。一方、中3時の不服従傾向と、暴走族集団への関与度（加入経験・集団暴走参加回数）には関連が見られなかった。そして、加入経験がある者ほど集団暴走参加回数が多いことが明らかとなった。また、中3時の不服従傾向が高い者ほど、集団暴走参加回数が多い者ほど、非行経験が多いことが示された。さらに、中3時の暴走族への興味と中3時の不服従傾向に正の相関が見られた。

最後に、暴走族集団への関与の程度の指標である加入経験と集団暴走参加回数には多重共線性があることが考えられるため、この2変数についてスピアマンの順位相関係数を算出したところ、16歳では有意な相関が見られなかった($r=0.11$, $n.s.$)が、17歳($r=0.31$, $p<0.01$)、18歳($r=0.26$, $p<0.01$)では有意な相関がみられた。そこで、17歳・18歳については2変数をそれぞれ単独にモデルに投入し分析を行った。その結果、加入経験から非行経験、集団暴走参加回数から非行経験のパス係数はいずれも有意であった。しかし、加入経験から非行経験へのパス係数は17歳・18歳いずれも0.13であるのに対し、集団暴走参加回数から非行経験へのパス係数は17歳で0.28、18歳で0.24であった。このように、加入経験と集団暴走参加回数を別に投入したモデルにおいても、集団暴走参加回数の方が加入経験より非行経験に及ぼす影響が大きいことが明らかとなった。

考 察

本研究の目的は、暴走族集団への関与を促す要因、暴走族集団への関与と非行経験の関連を探ることであった。パス解析から明らかとなった結果をFigure 7に示した。

まず、全年齢共通で中3時の暴走族への興味が高

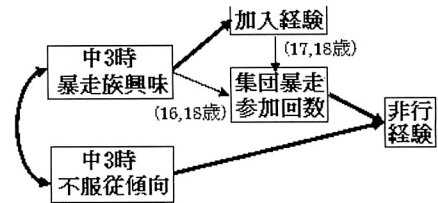


Figure 7 暴走族少年（全年齢）の非行経験に関するパス図

※図中、太い実線は全年齢に共通で関連が見られたパス、細い実線は特定の年齢でのみ関連が見られたパスを示す。

い者ほど加入経験があり、16歳・18歳では中3時の暴走族への興味が高い者ほど集団暴走参加回数が多かった。一方、全年齢共通で中3時の不服従傾向と暴走族集団への関与度（加入経験・集団暴走参加回数）との関連は見られなかった。これらの結果から、中3時の暴走族への興味という動機要因は暴走族集団との関与度に影響するが、中3時の不服従傾向という行動要因は影響しないことがわかった。

このように、暴走族集団への関与阻止のためには、中3時点での動機要因に注目する必要があることがわかった。行動面に比べると潜在的である認知面に注目する必要から、警察による取締りや対策に加えて、中学校・高等学校での暴走族加入阻止教室や学校・家庭・地域での働きかけが重要な役割を持つと言える。本研究の動機要因は、暴走族への興味という暴走族集団への関与と内容の近いものであったため、関与度への影響が強かったという点も考えられる。したがって、動機要因が行動要因よりも影響が強いとは言いきれないが、動機要因では影響が見られた一方、行動要因では影響が見られなかったことには注目すべきである。吉沢(1989)は、暴走族集団への加入は、両親など権威の対象となるものに対する反抗と、権威を打破しようとするプロセスで始まると主張している。こうした主張からは、暴走族集団への関与の予防を考える際、暴走族への純粋な興味・関心以上に、不服従傾向のような行動要因に目が向きがちであることがうかがえる。本研究では、中3時の不服従傾向が高い者ほど非行経験が多い傾向が見られたため、非行経験の予防については、ある程度不服従傾向によって予測できる可能性があったのに対し、暴走族集団への関与に関して言

えば不服従傾向とは関連がなかった。これは、吉沢(1989)の主張と矛盾するものといえ、学校・家庭において少年の暴走族集団への関与予防を考える場合には行動要因に注目しやすい傾向に警戒すべきであるということが指摘できよう。

そして、中3時不服従傾向と暴走族集団への関与度(加入経験・集団暴走参加回数)との関連は見られなかった。このことから、不服従傾向が高い者ほど暴走族集団への関与度を深めるとは言えず、暴走族について選択説は適用できない可能性があることが示唆された。また、加入経験の有無と非行経験の回数には関連が見られなかった一方、集団暴走参加回数が多い者ほど非行経験が多いという傾向が全年齢共通で見られた。すなわち、暴走族集団への関与度のうち、加入経験の有無では非行経験は左右されないが、集団暴走参加回数が多いほど非行経験も多いことが明らかとなった。但し、17歳・18歳については、加入経験・集団暴走参加回数をそれぞれ単独で見た場合、いずれも非行経験に影響を及ぼしていた。しかし、やはりその影響は加入経験より集団暴走参加回数の方で大きいことが見出された。このことから、加入経験の有無については、社会的促進説が限定的に適用できる場合があり、集団暴走参加回数については全年齢で社会的促進説が適用できることが見出せた。この結果は、選択モデルについては一貫した結果は得られていない(Gordon, 2004; Thornberry et al., 1993) 一方、社会的促進モデルについては概ね支持されている(Bjerregaard et al., 1995; Esbensen et al., 1993a; Gordon, 2004; Hill et al., 1996) という先行研究の知見とも一致している。

暴走族集団への関与のうち、集団暴走参加回数について社会的促進説が適用できるということは、集団暴走に参加することで非行が助長されることを意味し、特に集団暴走への参加を阻止することが非行防止に対し非常に重要であることがわかった。そして、暴走族集団への関与のしかたに関して、全体としては、暴走族集団に加入することよりも、集団暴走に参加することの方が非行経験を助長することがわかり、このことから、暴走族対策として、暴走族集団に加入している者に注目だけでなく、加入せずに集団暴走にのみ参加しているような周辺のメンバーに対しても、離脱支援・非行防止といった働

きかけが重要であることが示唆された。

なお、年齢ごとの分析結果によると、17・18歳において加入経験から集団暴走参加回数へのパスが有意であった。これが、暴走族集団に相対的に遅い年齢で関与し始めた者の傾向なのか、関与が長期的である者の傾向なのか、本研究からのみは断定できないものの、いずれにしてもなるべく早いうちに暴走族集団への関与を断ち切らせることが肝要であるといえよう。

現在、実際に警察により行われている暴走族集団を含む全般的な非行集団への対策は、中高校生対象の暴走族加入防止教室、非行集団の解体、少年・保護者に対する非行集団離脱を促す働きかけ、非行集団離脱少年に対する居場所の提供である(警察庁, 2006)。

暴走族加入防止教室については、本研究で明らかとなった知見を考え合わせると、防止すべきは加入だけでなく関与すること自体であるので、視点を広げて暴走族関与防止教室を目指すべきである。加えて、対象としては特に動機要因の高い者に注目すべきであり、これは例えば、暴走族に関連した書物・雑誌に興味を示しているかに注目する、暴走族への憧れや関心を調べるアンケートを実施するといった方法が考えられよう。

また、集団の解体・集団離脱を促す働きかけの際には、暴走族の場合は特に加入はしていないが集団暴走には参加するような周辺のメンバーまで広く対象とせねばならないだろう。集団を捉える際には周辺のメンバーも把握するようにする、集団を解体するのみならず集団暴走の防止にも注力する、といったことが考えられる。

そして、居場所の提供に関しては、その重要性は岡邊(2008)でも指摘されている通りだが、暴走族については、必ずしも集団だけが「居場所」を与えているわけではなく、集団暴走への参加によって「居場所」が与えられている可能性がある点に留意しなければならない。このことから、暴走族に関与する少年にとっての「居場所」とは集団のように明確ではないことが推測される。暴走族に関与する少年にどのような形の「居場所」を提供すればよいか、今後のさらなる研究と対策の必要性が指摘できる。

本研究の限界の第一としては、研究デザインの問題が挙げられる。今回は横断的調査を行い、先行研

究のモデルをふまえたり、対象者の選定条件を限定したりすることで、変数間の時間的な前後関係を想定した。しかし、これはあくまで一時点での調査であるため、時間的前後関係の正確さについては限界がある。暴走族集団と関わる以前の変数として設定した中3時に関する変数についても、回想により回答されている点で正確に時間的に先行しているものだと言い切れない。また、本研究では、暴走族集団への関与が非行経験に先行することを仮定して仮説モデルを設定し検証を行ったが、横断的計画であるためにこの前後関係を確定することもできない。すなわち、非行経験が暴走族集団への関与に先行するモデルを想定することも可能なのである。この限界を克服するためには、今回の研究結果をふまえ、今後縦断的調査によってこれを確認していく必要があるだろう。

第二に、暴走族集団に関与する前の非行傾向を測定する尺度(中3時の不服従傾向)と、暴走族集団への関与が影響を及ぼす非行傾向を測定する尺度(非行経験)が同一ではないため、選択説・社会的促進説については、厳密な意味で適用できるかどうか検証ができたわけではない。今回のような横断的調査では、回答者の記憶程度に依存するため、非行経験について中3時と現在で同一の尺度を用いるのは困難な部分がある。これも縦断的調査によって正確に検討できるようになるだろう。

第三は調査対象者の地域差の問題である。警察庁統計と比べ、本研究の対象者は甲信越・北陸地方、四国地方が多く、近畿地方が少ない傾向があった。本研究の対象は全国にまたがり代表性は高いと考えられるものの、本研究で得られた結果は、こうした地域差の影響を受けている可能性はある。また、Figure 2 でもわかる通り暴走族は西日本で多い傾向がある一方、国際交通安全学会 004 プロジェクトチーム(1977)・長山(1989)では暴走族の特性において東西差が見られることも指摘されており、今後はこうした地域差の今日的状況についても分析していく必要がある。

現在の暴走族については、前述のとおり研究が不足しているのが現状である。今後、本研究に類するような加入阻止に資する目的での縦断的調査による研究や、暴走族集団への関わりから離脱した後までの追跡による離脱支援を目指した研究や、複雑化・

多様化している形態を明らかにするような質的研究などさまざまな視点・手法の研究が必要である。

引用文献

- 朝野熙彦・鈴木督久・小島隆矢 2005 入門 共分散構造分析の実際 講談社。
- Bjerregaard, B., & Smith, C. 1993 Gender differences in gang participation, delinquency, and substance use. *Journal of Quantitative Criminology*, 9, 329-355.
- Bjerregaard, B., & Lizotte, A. J. 1995 Gun ownership and gang membership. *Journal of Criminal Law and Criminology*, 86, 37-58.
- Cohen, M. I., Williams, K., Bekelman, A. M., & Crosse, S. 1994 *Evaluation of the National Youth Gang Drug Prevention Program*. In M. W. Klein, C. Maxson, & J. Miller (Eds.), *The modern gang reader*. Los Angeles, CA: Roxbury, pp. 266-275.
- Curry, G. D. 2000 Self-reported gang involvement and officially recorded delinquency. *Criminology*, 38(4), 1253-1274.
- Curry, G. D., Decker, S. H., & Egley, A. H. 2002 Gang involvement and delinquency in a middle school population. *Justice Quarterly*, 19, 301-318.
- Esbensen, F., & Huizinga, D. 1993a Gangs, drugs, and delinquency in a survey of urban youth. *Criminology*, 31(4), 565-589.
- Esbensen, F., Huizinga, D., & Weiher, A. W. 1993b Gang and non-gang youth: Differences in explanatory variables. *Journal of Contemporary Criminal Justice*, 9(2), 94-116.
- Fagan, J. 1990 *Social processes of delinquency and drug use among urban gangs*. In C. R. Huff (Ed.), *Gangs in America*, Newbury Park, CA: Sage, pp. 266-275.
- Gordon, R. A. 2004 Antisocial behavior and gang membership: Selection and socialization. *Criminology*, 42, 55-87.
- 原田 豊・田村雅幸 1981 法改正後の暴走族の動向に関する研究 3. 離脱過程の分析 科学警察研究所報告防犯少年編, 22(2), 8-15.
- Hill, K. G., Hawkins, J. D., Catalano, R. F., Kosterman, R., Abbott, R., & Edwards, T. 1996 *The longitudinal dynamics of gang membership and problem behavior: A replication and extension of the Denver and Rochester gang studies in Seattle*. Paper presented at the annual meeting of the American Society of Criminology, Chicago.
- Hill, K. G., Howell, J. C., Hawkins, J. D., & Battin-

- Pearson, S. R. 1999 Childhood risk factors for adolescent gang membership: Results from the Seattle Social Development Project. *Journal of Research in Crime and Delinquency*, 36, 300-322.
- 北海道警察 2007 暴走族 (2007 年 6 月 19 日)
(<http://www.police.pref.hokkaido.jp/info/seian/syounen/supportseminar/motorcyclegang1.html>)
- 伊藤正彦 2009 暴走族の実態と今後の取組み (特集 暴走族対策) 月刊交通, 40(6), 4-19.
- 警察庁 2001 平成 13 年版警察白書 財務省印刷局.
- 警察庁 2002 平成 14 年版警察白書 財務省印刷局.
- 警察庁 2006 平成 18 年版警察白書 ぎょうせい.
- 警察庁 2008 平成 20 年版警察白書 ぎょうせい.
- 警察庁 2009 平成 21 年版警察白書 ぎょうせい.
- 警察庁生活安全局少年課 2009 平成 20 年中における少年の補導及び保護の概況.
- 国際交通安全学会 004 プロジェクトチーム 1977 暴走族と高校生に見る車接近の背景要因の研究 (中間報告) IATSS review, 3(1), 22-36.
- Lacourse, E., Nagin, D. S., Vitaro, F., Cote, S., Arseneault, L., & Tremblay, R. E. 2006 Prediction of early-onset deviant peer group affiliation: a 12-year longitudinal study. *Archives of General Psychiatry*, 63(5), 562-568.
- Le Blanc, M., & Lanctot, N. 1998 Social and psychological characteristics of gang members according to the gang structure and its subcultural and ethnic makeup. *Journal of Gang Research*, 5 (3), 15-28.
- 宮寺貴之・大江由香・渡邊和美・藤田悟郎・森田展彰・中谷陽二 2007 青少年による覚せい剤の初回使用状況—初回の入手態様による類型化—科学警察研究所報告, 58(1), 1-18.
- 長山泰久 1989 暴走族と高校生・中学生 屋久孝夫 (編) 暴走族 同朋舎 pp. 171-207.
- 岡邊 健 2008 4 章 少年非行の諸相 1 節 非行集団 小林寿一 (編) 少年非行の行動科学北大路書房 pp. 73-84.
- 佐藤郁哉 1984 暴走族のエスノグラフィー 新曜社.
- 田村雅幸・麦島文夫 1975 暴走族の実態分析 (I)—加入少年の特性について—科学警察研究所報告防犯少年編, 16(2), 114-131.
- 田村雅幸 1981a 法改正後の暴走族の動向に関する研究 1. 加入者の社会心理的特徴の分析 科学警察研究所報告防犯少年編, 22(1), 55-66.
- 田村雅幸 1981b 法改正後の暴走族の動向に関する研究 2. 集団特性の分析 科学警察研究所報告防犯少年編, 22(1), 67-74.
- Thornberry, T. P., Krohn, M. D., Lizotte, A. J., & Chard-Wierschem, D. 1993 The role of juvenile gangs in facilitating delinquent behavior. *Journal of Research in Crime and Delinquency*, 30, 55-87.
- Thornberry, T. P., Krohn, M. D., Lizotte, A. J., Smith, C. A., & Tobin, K. 2003 *Gangs and delinquency in developmental perspective*. New York: Cambridge University Press.
- Wang, A. Y. 1994 Pride and prejudice in high school gang members. *Adolescence*, 29, 279-291.
- 吉沢幸夫 1989 暴走族発生の要因—背景と歴史 屋久孝夫 (編) 暴走族 同朋舎 pp. 2-46.

(受稿：2009.7.1; 受理：2010.4.22)